

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520334

研究課題名（和文）エチオピアにおける無文字言語の文字化に関する総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study on the Introduction of the Writing Systems in the Languages of Ethiopia.

研究代表者

柘植 洋一（TSUGE YOICHI）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：50092276

研究成果の概要（和文）：エチオピアにおける文字使用に関して、その歴史的な推移の様相と現状を、現地調査と文献研究により詳しく明らかにした。また無文字言語の文字化の個別事例としてアリ語を取り上げ、調査を行うなかで、当該社会において文字化が持つ意味、役割を考察した。その過程で文字化資料を発掘し資料集としてまとめる事が出来た。こうした研究を通じて、エチオピアにおける文字化の特徴とその問題点を掘り下げる事が出来た。

研究成果の概要（英文）：Among the African countries Ethiopia is unique in having its own writing system since more than two thousand years ago. But its use has been confined to Geez and Amharic up until the 20th century. Now the situation has changed and many languages have come to be written. We traced the long history of the use of the writing system and succeeded in finding its characteristics and problems. We also took up the case of the Aari, one of the minority languages spoken in South-western Ethiopia, and made research to find and analyze the meaning of the introduction of the writing in the society. We have also collected Aari written materials and published them with notes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総 計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：文字化，リテラシー，エチオピア，無文字言語，少数言語，アリ語，オモ系諸言語，アムハラ語

1. 研究開始当初の背景

無文字言語の文字化に関しては特に危機言語研究との関わりで、多くの研究が発表され

ており、単なる報告だけでなく、更に進んで当該言語の文字化について積極的な提言を行っている場合も多く見られる。話者が何らかの文字を持つことが、当該言語の将来のあ

り方に重要な関わりを持つ事は言うまでもない。筆者がこれまで取り組んできたエチオピアについてはアフリカの他の諸国と異なり、例外的に古くから文字が使用されてきた。しかしながら、この文字使用は特定の言語に限定されており、またその言語における識字率も極めて低い状況があった。この状況は基本的に 20 世紀に入っても続き、大きな変化が見られるのは 1974 年の社会主義革命をきっかけとする帝政崩壊以降であった。ただ、その後の展開も多く民族語の文字使用導入へとストレートには行かなかった。この大きな流れについては筆者は以前から関心をもっており、詳細にこうした流れをとらえ直す必要を感じていた。

一方筆者は特にこの十年以上、科学研究費補助金を得てアリ語をはじめとするエチオピアの少数言語の基礎的言語データの収集分析にあたって来たが、この過程において個々の言語の文字化をめぐる状況は様々であり、そこに働く要因、文字化の受け止め方をはじめとする様々な局面で種々の問題が存在することに気がつき調査を通じて深く考察する必要性を認めるに至った。

こうした状況もあって、エチオピアでの文字使用の歴史とその展開を、特定の言語についてだけではなく、全般にわたって明確に跡づけつつ、現在の状況を的確に把握する必要があり、またその中において個別アリ語の文字化をめぐる状況を詳しく見る事によって、より深くエチオピアの諸言語の文字化を総合的にとらえる事が出来るだろうとの認識を得、本研究の着想に至ったものである。

2. 研究の目的

(1) 歴史的な文字使用の展開を明らかにする。紀元前一千紀におけるエチオピアへの文字導入から、紀元後数世紀でのエチオピア文字の成立をもとにするゲエズ語での文字使用から、19 世紀のアムハラ語の全面的な文字使用を軸に、他の言語の文字化が如何なる条件の下で、どのようなプロセスを経て展開されたか(展開されつつあるか)を明らかにする。これまでは特定の時期、テーマに関わる研究は行われてきたものの、ゲエズ語表記に関わるエチオピア文字の成立からの全歴史を視野に入れた研究はこれまではほとんど為されて来なかったものである。

エチオピアは多言語国家でありながら、文字使用は政治体制と密接に結びついており、アムハラ語以外の文字表記にあたっては極めて大きな障碍があった。すなわち文字使用は大きな政治的、社会的な意味を持っているのである。政治体制のあり方、民族意識のあり方との関わりのなかで特に、少数言語の文字化については研究が余り為されてい

いので、特に 1980 年代以降の動きを重点的に、的確に捉えていこうとするものである。

(2) 筆者がこれまで長年にわたって取り組んで来たエチオピア南部に分布するクシ系。オモ系諸言語の文字化の様相についての報告、分析は極めて散発的であり、その分析も余り為されてきてはいない。社会主義体制期から連邦制国家に移行する過程で実質的に祖言語の平等が保証されて来た流れの中で文字化が推進されてきた経緯はあるものの、その発展の度合いは様々であり、現在でもかなり流動的な状況にあり、なかなかその実相をとらえるのは困難な状況である。しかし、そこにおいてこそ文字化をめぐる問題点を浮き彫りにする事が出来るのであり、こうした個別事例の詳細な研究無くしては総合的に文字化をとらえる事は出来ないのである。

そこで、個別事例からエチオピアにおける文字化の問題点に迫るために、これまで特に記述研究の対象として調査を行ってきたアリ語を取り上げた。アリ語については、少数言語の文字化に関わる諸問題がリアルタイムで確認できるため、その状況を克明に観察、検討する事を目的としたものである。

更に可能であればアリ語以外の言語の文字化についても資料収集、現地での調査研究を行って、文字化をめぐる様相、問題点を出来るだけ多くの事例にあたって明らかにしていくことも目的とした。

(3) アリ語の文字化はここ 30 年ばかりの歴史しか持たず、未だ文字表記も広くは行き渡っていないのが実情である。それには様々な理由があるが、その一つとしてどのような文字を採用し、どのような方針に基づく正書法を確立すれば良いかとの問題が大きなものとして指摘出来る。筆者は現地において文字化作業を進めているグループから相談を受けた事もあり、本研究では更に進んで、アリ語表記に最適な文字システムを検討開発し、可能であれば現在文字化作業を行っているグループに提示し共同してより相応しい表記方法を考えていくことも目的の一つとして設定した。

3. 研究の方法

(1) 研究の進め方については、実施地域としてはエチオピアと日本に分けられる。方法としてはフィールドワークと文献研究に分けられるが、日本では文献研究とエチオピアでの調査整理を行った。エチオピアでは現地調査と文献研究を行ったが、いずれにしても、文献研究については科研費補助金によらず行える部分も多くあるので、本研究では現地調査に重点を置いた。調査地はエチオピア南部州のジンカ市を中心とする地域であり、ジンカ市とメーツェル村で、アリ語と他言語

(特にアムハラ語)の使用状況を観察するとともに、これまでの文字化資料の収集を行った。また、アジス・アベバでは文字化に大きな役割を果たしているカレ・ヘイワト教会関係者からの聞き取りならびに文献調査を行った。

(2) アリ語以外の個別言語の文字化についてはエチオピア南部州北オモ・ゾーンのアルバ・ミンチ市で、デガモ語、ゴファ語の教育面での使用状況について聞き取り調査を行った。

(3) 日本での文献研究では先行研究並びにこれまでの調査での知見を元にエチオピアにおける文字使用の歴史的な変遷についてのまとめを行った。また当初、ロンドンにおいてこれまでの研究蓄積のあるロンドン大学 SOAS の研究者との意見交換ならびに同図書館収蔵のエチオピアで発刊された資料ならびに学位論文の調査を行う予定であったが、日程の関係で実施できなかった。

(4) アリ語についてはこれまでの文字使用のあり方を言語学的に再検討し、あらたな表記法を提案すべく検討を行った。この作業のためにはまだ十分な記述が為されていないアリ語の言語学的データ収集が不可欠であり、更なるデータの蓄積のための聞き取り作業を行った。また文字化資料の言語学的分析を行い、その内容を明らかにするとともに、表記方法を分析した。

4. 研究成果

(1) 目的の(1)に関わる、エチオピアの諸言語の文字化の展開を歴史的に跡付け、そこにおける種々の問題点を洗い出す作業については多くの文献資料、先行研究を調査する必要がある。筆者はこれまでも基礎的な作業を行ってきたが、本研究で補助金を受けた事により、更にその調査範囲を拡張する事が出来た。そして、下記[図書]の項で挙げた論文により、その一部を示す事が出来た。本論文はエチオピアにおける文字化についての初めての踏み込んだ形での研究であり、特に文字化の意味する事は何であるかの考察についてはまだ不十分ではあるものの、研究会での発表や書評において好意的な評価を受ける事が出来た。ただ、この仕事は更に充実させる必要がある。その一つは今回利用できなかった資料にあたり、詳細を詰めていく作業である。このためにはエチオピアでしか見られないものやヨーロッパの大学、図書館所有のものなどもあるので、その調査が必要である。もう一つは、この流れから読み取れるものが何であるかの考察を深める事である。

(2) 目的の(2)に掲げたアリ語文字化については、まず、アリ語の文字資料としては

最も早い資料について、言語学的分析を行いその内容と言語を明らかにした。本資料は出版地、出版年が記載されていないため、調査の途中でコンサルタントの方言とは異なる事が明らかになった。その結果部分的には不明の箇所を残す事となったが、当該部分はそれほど量の量ではなく、基本的には内容は把握でき、言語学的な分析も済ませる事が出来た。その結果ここで現れているアリ語は日常用いられている姿を色濃く伝えるもので、初めて当該言語を文字化する際の一つの資料として貴重である。なお、3年目の補充調査の際に、この資料の方言が明らかになった。従って今後はあらためて当該方言話者の協力を得て、先の分析結果を再検討する事により、より確実かつ明確にその言語を明らかにする事が必要となった。

またこの補充調査の過程で新たに文字資料8点を確認する事が出来た。これらの資料の表記法の調査ならびに言語学的な分析はアリ語の研究の上でも極めて重要である。ひとまずこれらの資料に簡単な解説を付して『アリ語資料集』として刊行する事が出来た。アリ語の文法的記述はまだほとんどなされていない現状にあって、本書は言語学関係者だけでなく、アリ文化に関わる研究者にも多くの貢献をなすものと確信する。本資料の分析は今後の大きな課題である。今後は更に資料の収集に努めるとともに、これらの資料の刊行に関わる経緯を明らかにする一方、アリ語の言語学的資料として重要であるとの観点から、ローマ字転写、翻訳、分析を行って行く必要が大いにある。

(3) 目的の(3)に掲げた、アリ語の文字化、正書法に関しての言語学者としての立場からの提案については、明確な形で示す事は出来なかった。その理由は、これまでの文字化が何故受け入れられなかったのかを詳しく分析することと、現在文字化グループが進めつつある新正書法による表記の受容の様相を今後しばらく見ていく必要があるからである。

今後はまず基礎的な作業として関連文献のデータベース作成が必要である。それと並んで現地調査により文字化の実態をつぶさに観察し、文字化がどのような意図のもとに、どのような形で推進されており、それが当該言語話者にはどのような形で受容されている(或いはされていない)かを明確にとらえ、そこに潜む問題点を明らかにしていく作業が必要である。具体的にはエチオピアでの文字使用の歴史、現状を文献調査、現地調査を通じてより詳細に見ていくとともに、アリ語の事例に加えて他の言語での事例を調査していく計画である。こうした研究があって初めて総合的研究の名にふさわしい研究となるのであり、本補助金による3年間の研究は

そのための方向を明確にした点は自己評価できるものの、今後長い期間をかけて、エチオピア側の研究者も含めた形での多くの研究者との共同作業を行いながら研究を行っていく必要があるであろう。更に、こうした研究を積み重ねた上で、エチオピアだけでなく他の地域での文字化との比較対象を行っていき、文字化をめぐる諸問題を考えていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 柘植洋一『アリ語資料集』pp. 1-168.
(2010) 査読無
2. 柘植洋一『アムハラ語入門』pp. 1-74.
(2008) 査読無

〔学会発表〕(計1件)

1. 柘植洋一, 「文字は誰のものか? —エチオピアの無文字言語の文字化をめぐる—」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「多言語状況の比較研究」第2回研究会, 2008年10月25日, 東京外国語大学(東京都)

〔図書〕(計2件)

1. 柘植洋一 三元社, 梶茂樹・砂野幸稔(編著)『アフリカのことばと社会』, 2009年, pp. 249-279
2. 柘植洋一 大修館書店, 梶茂樹・中島由美・林徹(編)『事典世界のことば141』, 2009年, pp. 474-477

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柘植 洋一 (TSUGE YOICHI)
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号: 50092276

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし